

無肥料、無耕耘栽培を “自然” に学ぶ

徳野 雅仁

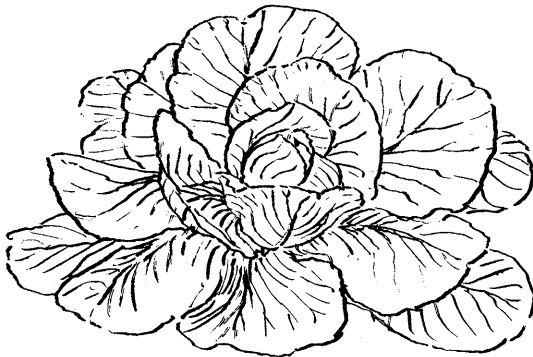
野菜づくりをはじめたころ、畑で目にしたいくつかの光景は、不思議な感動をとまなべて心に焼きついています。そのなかのひとつが、畑の隅の通路脇で大きく育っているダイコンを見たときでした。タネをまき、生長を見守っていたダイコンではなく、こぼれダネによって発芽し、草に混じって気づかぬうちに大きくなっていったダイコンでした。すでに根の直径は七センチ、ややカーブを描きながら三十センチも地上にせり上がり、あきらかに畝で育つダイコンより見事に育っていたのです。ひき抜いてみるとゆうに五十センチを超えていました。耕さず、肥料も施さず、手入れもしていないのにと思うと、なにか腑に落ちない妙な感覚を味わったものです。よく耕し、草を抜き、肥料をたっぷり施さなければ野菜は育たないと思いきんでいたからです。ひび割れたアスファルトの隙間に生える雑草と同じように、コマツナやカラシナもわずかな隙間に根を下ろして大きく生長し、舗道の割れ目に芽生えたアシタバがやがてコンクリートを持ち上げ、破壊しながら生長するという生命力の凄さも見せつけられたのです。

ある年に行ったキャベツの無肥料、無耕耘の実験栽培では、十数年雑草が生え、ムクゲの落葉が毎年堆積していた場所に、間引き苗二株を植え穴のみつくって定植してみました。ムクゲの葉が茂る春から半日陰になりますが、二株とも立派な生長を見せ、生き生きと瑞々しく、つややかな葉を

展開し、見事な結球を見ました。特筆すべきは、アオムシ、ヨウトウムシの発生が全くなく、土壌がこのように自然で、人が手を加えていない状態では作物も病気になるはず、キャベツの放任栽培も可能となります。

土を踏み固めたり、雑草が生えない土地では野菜も育ちませんが、このケースのように自然に団粒構造が形成され有機質が堆積した土壌では無肥料栽培も可能で、肥料による土壌環境の悪化もなく病虫害の発生もなくなります。また、数年来、自然栽培を行ってきた場所での四葉キユウリの生長にも目を見張るものがあり、収穫を終え、九月に刈り取るまでウドンコ病すらでなかった記憶は忘れられません。

自然農のおもしろさを目のあたりに確認できたことがありました。それは、十三年間にわたって借りていた農園が閉鎖された後のことです。春に閉鎖後、農園は整地されて畑の面影は消えていましたが、三カ月後、鉄条網で囲まれた農園跡で、自然農を行っていた場所のみ青々とこぼれダネが育っていたのです。その年の秋にも。さらに、翌年の十二月にも見事に育つチンゲンサイやコマツナ、ミズナなど十種を超える野菜が病害虫を受けず健康に育っていたのです。およそ栽培中から最長で五年間、堆肥すら施していない土地で閉鎖後も作物は見事に育っていたのです。



(イラストレーター イラストも筆者)